

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520044

研究課題名(和文) ハンス・ヨナスの哲学の統合的かつ重層的な理解の構築

研究課題名(英文) Construction of an integrated and multi-dimensional understanding of Hans Jonas' philosophy

研究代表者

品川 哲彦 (Shinagawa, Tetsuhiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90226134

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はグノーシス研究、生命哲学、未来倫理、ホロコースト以後の神学など多様な面をもつヨナスの哲学的経歴を統合的に理解することを目的とした。その生命哲学に含まれる目的論的自然観、存在と善を結びつける形而上学、グノーシス思想と近代哲学に自然からの離反という共通の欠陥をみる指摘、神学的思索はいずれもそれだけをとれば価値多元社会の現代では反時代的と批判されやすい。しかしその哲学は、人間以外の自然のみならず人間自身が技術的操作の対象と化している現状への危機感の表明である。本研究は、英独で発刊された書籍に収録された二編を含む七編の論文、依頼講演二回の学会発表を通じて上記のヨナスの現代的意義を示した。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at an integrated interpretation of Jonas' philosophy, which has various phases such as investigation of Gnosticism, philosophy of organism, future ethics, and theology after Auschwitz. Each phase, e. g. its teleological view of nature implied in the philosophy of organism, his metaphysics joining existence with value, his finding of detachment from nature commonly included in the modern thought and Gnosticism, and his theological thinking, is likely to be criticized as anti-modern in pluralistic contemporary society. His philosophy, however, manifests a sense of impending crisis of our situation that man does technologically manipulate not only non-human nature, but also human beings themselves. This research showed the contemporary significance of Jonas' philosophy in seven papers, two of which were printed in two books published respectively in England and Germany, and two requested lectures in academic meetings.

研究分野：哲学、倫理学

キーワード：倫理学 哲学 宗教学 未来世代 責任

### 1. 研究開始当初の背景

ヨナス(Hans Jonas1903-93)については、日本では、彼の初期の研究主題の『グノーシスの宗教』(秋山さと子・入江良平監訳、人文書院)が1986年に邦訳されて以来、主著『責任という原理』(加藤尚武監訳、東信堂)が2000年、もうひとつの主著『生命の哲学』(細見和之・吉本陵訳、法政大学出版局)が2008年に、その他にも数冊が邦訳されるというふうに紹介が進んできた。ヨナスに深い関心を寄せた宗教学者で生命倫理学者のウィリアム・ラフルーアが指摘しているように、ヨナスは、彼が第二次大戦後によくアカデミックな地位を手に入れたアメリカ国内よりも、ひょっとすると日本で積極的に摂取されたといえなくもない。しかし、その実情は、彼の哲学的遍歴の多面性を反映してその諸相が個別に紹介されてきたというべきものだった。

本研究の研究代表者はヨナスの晩年の神学的思索『アウシュヴィッツ以後の神』の邦訳を法政大学出版局から2009年に刊行し、その訳書のなかに彼の実人生と哲学的経歴を跡づける小伝を収録した。これは日本においてヨナスの哲学的経歴全体を見渡す初めての紹介とあっていいものだったと自負している。研究代表者はその時点で一通りにヨナスの哲学的経歴を展望する準備を整えていた。しかし、その哲学的経歴の諸時期のすべてについて専門研究としての水準において論考を進めるまでには至っていなかった。本研究に着手したのは、そのためである。

### 2. 研究の目的

ヨナスの哲学的遍歴は、(1)ハイデガー、ブルトマンを師としてのグノーシス思想研究、(2)戦後の生命哲学と生命倫理学への寄与、(3)環境危機に抗して未来の人類を存続せしめる現在世代の責任を説く倫理、(4)ホロコースト以後の神概念の思索、のおよそ四つの相に分節される。

(1)の時期において、ヨナスは(1920年代当時としては最も現代的であった)実存哲学と紀元一四世紀のヘレニズム世界に形成されたグノーシス思想との親縁性を発見し、実存哲学を鍵としてグノーシス研究を進めていった。その視点はグノーシス思想の解釈史において今なお画期的な業績として認められている。ヨナスはグノーシス思想の研究者として注目されてその哲学的経歴を開始できた。ところが、ナチスによるドイツ政権掌握によって、ユダヤ人であるヨナスは研究を順調に進展させる機会を奪われ、ドイツから出国せざるを得なかった。同じ年に、師ハイデガーはフライブルク大学総長に就任してナチスに加担する。それを転機としてヨナスのなかで実存哲学(とグノーシス思想)の評価が一変する。パレスチナに移住し、ユダヤ人として第二次大戦に志願し、戦後はイスラエル独立戦争にも関与して研究生活を途

絶せざるを得なかったなかでヨナスが温めていた構想は、グノーシス思想と実存哲学とが共有している自然と人間との乖離を克服する生命の哲学(有機体の哲学)であった。それが戦後の(2)の時期の彼の主題となる。ところが、自然のなかに人間を位置づける試みは、自然のなかに目的や価値を見出す目的論的自然観、存在と善とを結びつける形而上学といった反近代的な着想に通じていく。(2)の生命哲学が評価され、彼は生命倫理学の研究拠点ヘイスティングス・センターのフェローに迎えられ、さらにまた自然への関心は地球規模での生態系破壊に抗して未来世代の人類を存続せしめる現在世代の責任を説く(3)へと結実していく。この展開を表面的にみれば、ヨナスは最も先端的な問題である生命倫理学や環境倫理学に関わった哲学者であるが、それにもかかわらず彼の思想は、上述のように、近代批判を含意する反時代的な要素を含んでいる。さらに、価値多元社会である現代に責任原理を浸透させるために、ヨナスは『責任という原理』では神学的考察にふれずに責任原理を定式化した(4)の神学的思索において(2)の生命哲学を含んだ宇宙創成論を展開するにあたって、未来世代の人類の存続を可能にする地球環境を残す現在世代の責任は世界を創造した神のまえでの人類の責任として解釈される。前述した現代的な主題と反近代的な着想との緊張関係に加えて、そこには、自分が生まれ育った伝統に依拠してはならない哲学者の使命感とそれにもかかわらず彼のなかに強靱に残るユダヤ人たる自覚とのあいだの緊張関係が付加される。二つの緊張関係の交差するところに、さらに、哲学の依拠すべきロゴスとロゴスによっては説明できないことがらを語るミュートスとの緊張関係が生まれている。

このようにヨナスの哲学は幾重もの緊張関係によって推進されてきた。したがって、ヨナス研究者のなかでも、ヨナスの哲学的経歴全体を展望しながらも、たとえば、クリスティアン・ヴィーゼはヨナスのユダヤ的側面に焦点をあて、ヴォルフガング・エーリッヒ・ミュラーはヨナスのグノーシス研究と神学的考察に焦点をあて、討議倫理学を出自とする論者たちは『責任という原理』の基礎づけに主として焦点をあてるといふふうに分岐したかたちで研究が進められている。その彼の哲学を、対立する要素や時期のいずれにも偏らずに統合的かつ重層的に理解しようとするのが本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

基本的に、研究代表者個人による文献読解研究である。ただし、日本国内では集めにくいユダヤ関係の調査と文献資料を集めるためと意見交換のために、毎年、ヨナス研究の盛んなドイツに出張する。主たる訪問先は、すでにコンタクトを得ているベルリン自由大学のハンス・ヨナス・ツェントルム、ユダ

ヤ関係のドイツ語文献を蒐集してあるケルン中央図書館、ヨナスの生地であるメンヒェングラードバハ市立図書館、あるいはまた、研究代表者が2007-2008年にかけて客員研究員を勤めたケルン大学、さらにまた、ホロコースト以後の神学とドイツにおけるユダヤ人の境遇を調べるためにドイツ各地にある強制収容所跡やユダヤ博物館等である。

研究開始当初の見通しでは、すでにいくつかの論考を発表している(3)(4)の時期の考察よりも(1)(2)の時期の考察を先行する予定であった。しかし、実際には2002年に行なった二つの依頼発表を軸として研究を進めていくこととなった。そのうちひとつは、生命倫理学を主題とした国際シンポジウム Uehiro Carnegie Oxford Conference での依頼発表であり、もうひとつはハイデガー・フォーラムでの依頼発表である。その結果、(3)(4)の時期を主題にしつつ、(1)(2)の時期を振り返る研究の進め方をとった。

そのような、いわば依頼に答えるしかたで論考を重ねたために必ずしも当初の予定通りの研究の進捗にはならなかったが、他方で、ハイデガー・フォーラムでの発表の主題であったヨナスとハイデガーとの関係は(1)から(2)への転機を跡づけて整理する意味と(3)が含む科学技術批判を明確にする意味をもっていた。また、Uehiro Carnegie Oxford Conference での発表は、(2)の相の生命倫理学者としてのヨナスの占める位置を再確認する作業でもあった。

ただし、当初予定していた、とくに日本でのヨナス研究のなかで最も研究の進んでいない(1)の時期の考察に本研究の所定の期間中には十分に立ち入ることができなかつたために、研究最終年度に研究計画を再構築して新たに基盤研究(C)に応募し、採択され、2014年度以降に研究を継続している。

#### 4. 研究成果

直前に記したように、本研究は2011年度に採択され、2014年度まで交付が内定していたが、研究計画を再構築して新規応募したところ採択されたために結了したものである。したがって、ここでは実質的に新たな課題での研究に入った2014年度の研究成果については省略し、2011-2013年度の三年間の研究成果について述べることにする。

2011年度には、価値多元主義の現代社会においてヨナスの形而上学・自然哲学を倫理学に結び付ける試みのもつ意義を論じた論文「価値多元社会における倫理、形而上学、宗教」を公刊した。この論文では、神学の遺産は近代の世俗化のなかで(たとえば、神の似像としての人間の尊厳は宗教的背景とは独立に、たんなる手段にされてはならないというカント的な意味において生き残ったように)継承され、しかしまた、その何がしかの意味を失っていることを指摘したハーバマスの問題提起をあわせて論じた。討議倫理学

はヨナスにたいして批判的なスタンスをとる場合が多いが、近代と近代が否定した超越の問題をめぐっては、両者が近代の意義を問うというひとつの問題意識を共有していることを示したわけである。

2012年度には、前述のように、東京で開かれた国際シンポジウム Uehiro Carnegie Oxford Conference (総題 *Life: Its Nature, Value and Meaning - No Turning Back? Ethics for the Future of Life*) における依頼発表 "The status of human being: manipulating subject, manipulated object, and human dignity" を行い、ヨナスの責任原理と人間の尊厳を結びつける試みを行った。第二次大戦後はアメリカを研究の場としたヨナスであってもこれまで記したその反近代的要素を含む形而上学的傾向のために英語圏ではあまり高く評価されていない。同カンファレンスは英米系の研究者が多かったが、そういう場でヨナスに注視する意義を説いたことになる。

また、東北大学で開かれたハイデガー・フォーラム第7回大会での依頼講演「技術、責任、人間」では、ヨナスとハイデガーの関係を跡づけるためにヨナスの哲学的経歴全体を顧みながら、主として(3)(4)の時期に属する『責任という原理』のみならず、*Philosophical Papers* や *Technik, Medizin und Ethik* や *Philosophische Untersuchungen und metaphysische Vermutungen* 等々に収められた諸論文を参照してヨナスの見解に立脚してハイデガーの技術論を批判した。

これらの講演は、三年目の2013年度において、前者は "The status of human being: manipulating subject, manipulated object, and human dignity" と題して、イギリスで出版された単行本 *Ethics for the Future of Life: Proceedings of the 2012 Uehiro-Carnegie-Oxford Ethics Conference* に収録され、後者は加筆修正して論文「技術、責任、人間 ヨナスとハイデガーの技術論と対比」として『Heidegger Forum』誌に掲載された。

それとは別に、ベルリン自由大学ハンス・ヨナス・ツェントルム初代所長のディートリヒ・ペーラー教授の定年記念論文集 *Dialog-Reflexion- Verantwortung. Zur Diskussion der Diskurspragmatik* 発刊にあたって、ペーラー教授のご厚意によって、研究代表者がすでに日本語で発表している晩年の神学的思索のヨナスの哲学的経歴のなかでの位置づけを主題とした論文をドイツ語で再編成して同論文集に収録することができた。"Der nicht omnipotente Gott und die menschliche Verantwortung" がそれである。同書にはドイツを中心とするヨナス研究者による26編の論文が収録されており、そのなかに上記論文を寄稿できたことは日本でのヨナス研究の進捗状況を報告するという

意味ももっていた。

さらに、研究代表者が主宰している関西大学生命倫理研究会（現在は関西大学倫理学研究会と改称）において、ヨナスを主題とした企画を行った。当日はヨナスを研究している若手研究者である吉本陵（大阪府立大学客員研究員）、戸谷洋志（大阪大学大学院博士後期課程）に発表してもらったほか、研究代表者自身も「神にたいする人間の責任という概念は成り立ちうるか」と題して発表した。この発表は、ヨナスの神概念を責任原理のなかで語られる乳飲み子になぞらえる解釈（Jahsohn等）にたいして、責任原理の責任概念は存続の脅かされうる生き物にたいするものであるから神には妥当しないと批判し、BultmannとJonasの往復書簡の読解にもとづいて、神と人間の関係では、「神にたいする責任」というものは存在せず、「神のまえでの責任」のみが存在するとあらためて指摘したものである。同研究会の活動は、同研究会のウェブサイト（<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/kuses/kuses.htm>）で公開している。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計4件)

品川 哲彦、「技術、責任、人間 ヨナスとハイデガーの技術論の対比」、*Heidegger-Forum*, 7号、ハイデガー・フォーラム、2013年、11-122頁、査読無（依頼論文）

品川 哲彦、「他者の人間性への尊敬 安彦一恵氏の問いかけに答えて」、*Dialogica*, 15号、滋賀大学倫理学・哲学研究室、2013年、1-17頁、査読無。

SHINAGAWA, Tetsuhiko, “Why and How Hans Jonas Been ‘Welcomed’ in Japan?: A Reply from Japan to LaFleur’s Interpretation”, *Journal of Philosophy of Life*, vol. 2, no.1, (2013, March), pp.15-31. 査読有。

品川 哲彦、「価値多元社会における倫理、形而上学、宗教」、『宗教と倫理』、11号、宗教倫理学会、2011年10月29日、5-24頁。査読無（依頼原稿）

〔学会発表〕(計3件)

品川 哲彦、「神にたいする人間の責任という概念は成り立ちうるか」、第21回関西大学生命倫理研究会、2013年7月20日、関西大学・大阪府・吹田市。

品川 哲彦、「技術、責任、人間」、ハイデガー・フォーラム、2012年9月16日、東北

大学・宮城県・仙台市（依頼発表）

SHINAGAWA, Tetsuhiko, “What is the status of the human being?: manipulating subject, manipulated object, and human dignity”, Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012, March 18, 2012, International House of Japan (国際文化会館)・東京都・港区。（依頼発表）

〔図書〕(計3件)

SHINAGAWA, Tetsuhiko, “The Status of the Human Being: Manipulating Subject, Manipulated Object, and Human Dignity”, *Ethics for the Future of Life: Proceedings of the 2012 Uehiro-Carnegie-Oxford Ethics Conference*, (ed.) Tetsuji Uehiro, Oxford Uehiro Centre for Practical Ethics: Oxford University, 2013年7月、総ページ数158頁 (pp.144-154)

SHINAGAWA, Tetsuhiko, „Der nicht omnipotente Gott und die menschliche Verantwortung“, *Dialog-Reflexion-Verantwortung. Zur Diskussion der Diskurspragmatik*, (Hrsg.) Jens Ole Beckers, Florian Preussger, und Thomas Rusche, Koenigshausen & Neumann, 2013年3月、総ページ数464頁（執筆担当 S.427-S.442）。

品川 哲彦、「責任」、『生命倫理学の基本概念』、香川知晶、櫻則章編、丸善、2012年1月31日、総ページ数251頁（執筆担当176-190頁）

〔産業財産権〕  
出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/index.htm>(研究代表者のウェブサイト)  
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/englishindex.htm> (同じく英語版)  
<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/kuses/kuses.htm> (関西大学倫理学研究会のウェブサイト)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

品川 哲彦 (SHINAGAWA, Tetsuhiko)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：90226134

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：